

フェンシング競技における 個人戦と団体戦に影響する性格特性^{*1}

Personalities influence for the performance of
individual / team competition on fencing

井上裕二

INOUE Yuji

経営学研究科 (2009年度博士前期課程修了生)

yuji-ino@alice.asahi-u.ac.jp

畦地真太郎

AZECHI Shintaro

経営学科

az@alice.asahi-u.ac.jp

要旨

本研究は、フェンシング競技において「団体戦」と「個人戦」の試合方式の違いが選手のパフォーマンスに与える影響について調査研究したものである。フェンシング競技では「団体戦」の試合形式が特殊なため、「個人戦」を得意とする選手が必ずしも団体戦でパフォーマンスを発揮できるとは限らないことが分かった。本研究では、スポーツ選手に関わる性格特性の先行研究から、「自己効力感」「公的自己意識」「私的自己意識」の3性格特性が影響を及ぼすのではないかと考え、質問紙法による調査を行った。結果は必ずしも明確ではなかったが、副次的に測定した「フェンシングへの関与」及び「フェンシングへの有能感」が、団体戦を得意とする認知に影響を与えている傾向が見いだされた。

キーワード：フェンシング、自己効力感、自己意識、関与、有能感

1. はじめに

本研究の調査者の一人（井上；以下、調査者は井上を指す）は、大学のフェンシング競技部で選手の育成・強化を行っている指導者である。選手の競技力の向上のための技術トレーニングはもちろんのこと、選手が試合で最高の実力、“ピーク・パフォーマンス”を発揮するためにはどうしたらよいのかを、自らの経験や知識の中で試行錯誤して指導してきた。しかし、いまだにそれを解決するための核となる答えは出ていない。人によって

性格や容姿などが違うように、これらの解決にも人それぞれの様々な手法があるのだと考えるようにもなった。この多種多様なメンタル面での個人差について、実際に自らの選手経験を通じて感じたこと、および指導現場において疑問に感じたことを要約すると、次のようになる。

*1 本論文は、朝日大学大学院経営学研究科博士前期課程2009年度修士論文「フェンシング競技における個人戦と団体戦に影響する性格特性」(井上)を編集し、加筆・修正を加えた物である。

明らかに競技力が低く、個人戦で勝つことはなかなか難しいと指導者に見なされていた選手が、団体戦のメンバーとして出場し相手チームのエースに勝利し、大金星を挙げてチームの勝利に貢献するということがある。また、それとは逆に、練習試合のようなプレッシャーのない試合で、10回対戦したら10回とも勝てるような格下と思われる相手に、公式戦では勝てなかったということがある。その中でも、調査者のこれまでの経験では、明らかに後者のほうが多い。

この原因には、次のようなことが考えられる。

- ①選手のコンディションが悪かった
- ②試合の規模が大きすぎて（あるいは小さすぎて）集中できなかった
- ③チームワークやチームメイトとの信頼感が醸成されていなかった
- ④対戦相手との相性（競技スタイルや試合運び）が悪かった

しかし、これらの要因のように偶然に左右される場合だけではなく、選手の性格特性という一定のコントロール可能な要因が、団体戦でのパフォーマンスに影響しているのではないかと考える。試合で実力を発揮するためには、選手のメンタル・マネジメントが必要不可欠である。同じ大会において、個人戦と団体戦でパフォーマンスが違うということは、試合形式の違いが選手のメンタルに何らかの影響を与えているからではないかと考えられる。

以上の背景により、フェンシング競技において、同一選手が個人戦と団体戦という違う状況に置かれた場合に、パフォーマンスが異なるのは、メンタル面、特に性格特性の要因が影響しているのではないかという問題意識を持った。

2. フェンシング競技の特殊性

同一の選手が同じ個人競技をするなかで、同じフェンシング競技なのに、個人戦と団体戦という試合形式の違いだけで、パフォーマンスに差が出るのはなぜか。本人の競技能力は、1つの大会と

いう短期間の間では大きく変わらないはずなのに、自分の置かれた状況や立場が違うだけでパフォーマンスに差がでるのはなぜか。これは、1.節で述べたようなメンタル的な要素で左右されるのだろうか。もしそうだとするならば、それは個人の性格的な要因によるものなのだろうか。

ここで問題になるのが、フェンシングに限らず他の競技スポーツにおいても同様に存在する、個人戦と団体戦という試合形式の違いである。これがパフォーマンスに大きく影響していると考えられる原因には、“チーム”の存在があると推測される。チームの存在が選手個人のパフォーマンスに影響する媒介要因として、“動機づけ（特に達成動機）”や“性格”などが考えられる。

達成動機とは、個人（選手）が自己の目標をどれだけ強く達成しようと考えているかという度合いである。達成動機の高い選手では、当然競技力も高い選手が多い。しかし、一般的なスポーツ心理学の先行研究で示されている達成動機についての議論では、競技力のあるスポーツ選手の特性としてこれらが高いことが望ましいことが示されているのみである（Lerner and Locke, 1995）。達成動機の強さが、どのように個人戦と団体戦の違いに影響している（あるいは影響されている）のかについての実証的な研究を見つけることはできなかった。さらに、その他の性格要因についても、同様に先行研究が少ない。

競技スポーツの指導者やキャプテンは、チームのメンバー（試合に出場するレギュラー）を決める際に、選手の内面的な要因を強く考慮しなければならない。にもかかわらず、それが目に見えない部分であるために、どのように考えればよいか非常に苦慮するケースが多いと考えられる。なぜなら、一般的には選手に対して心理測定などを行うことはまれであり、さらにどのような内面的要因（動機づけや性格特性）を持つ選手が個人戦・団体戦にそれぞれ向いているのかを示す、実証的な研究がないからである。実際に試合に出場させると、事前の予測とは全く異なる結果になり、「実際に戦ってみないと分からない」という誤差部分

チームのポイントに加算されていくという点である。これが選手に対して強い影響を与えているのではないかと考える。

フェンシングの団体戦は、例えば、団体競技である球技のように、ボールのような形がある物をつないだりするのとは大きく異なる。チームでつながれるのは個人の得点であり、そこに面白さがある反面、競技としての恐ろしさも垣間見ることができる。

個人戦においては、自分だけの戦いであるため何点とられようが負けは負け、勝ちも勝ちといったように、精神面で割り切れる部分が多い。しかし、こと団体戦に至ってはそうはいかない。自分が得点をとられることにより、チームにそれがそのまま影響してしまうところにある。逆に、対戦相手の中で、一人でも調子の悪い選手がいれば、そこに付け入る事で大きなチャンスがやってくる。

このことを図2-1.の例を使って説明する。1試合目と2試合目では朝日大学が順当にポイントを重ねていたが、3試合目になって、朝日大学のB選手が〇〇大学のD選手との対戦で大量にポイントをとられた結果、2試合目まで朝日大学が勝っていたのが一気に逆転されてしまった。朝日大学は8試合目までは9ポイントのリードをされていたが、9試合目でC選手の大活躍により14ポイントの大量得点を挙げ、逆転勝利を収めた。

この例で説明したように、フェンシングにおける団体戦では、チームで勝利に向かって頑張るといふ要素より、個人の戦績がチーム全体に影響する要素のほうが大きいことが分かる。ということは、チームの中に絶対的なスーパーエースがいるチームは勝つ可能性は非常に高い。逆にチームの中に力が劣る選手や調子が悪いものがいれば勝利は難しくなってくる。

また、例で挙げたような団体戦での展開は、実際のフェンシングの試合では、それほど珍しいことではない。むしろ、こういったシーソー・ゲームや大逆転の波乱が常に生じる可能性があるところに、団体戦の面白さと怖さが両立しているのだと考える。

このような得点の動きが大きい原因には、もちろん選手の技術力の違いがもたらすものが大きい。しかし、試合の現場では、技術力の差だけで大逆転が起こるわけでない。同じような実力の選手同士であった場合でも、大逆転は度々起きる。また、実力が大きく異なる選手の対戦で、弱者が強者に勝つ、いわゆる「大番狂わせ」という波乱も多々起こっている。こうしたことから、フェンシングにおける団体戦の結果には、個々の選手の技術力以外の部分が大きく影響されていることは明らかである。

以上のような試合形式においては、一人の選手が“ブレーキ”になり、チーム全体の勝利を取り逃す可能性があり、それがメンタルに対して大きく影響を及ぼす要因になっているのではないかと考えられる。

このようなことから、フェンシングにおける団体戦では、個人戦の状況とは大きく異なり、「チーム」という存在が、選手の心理に何らかの形で影響しているに違いないと考える。このことが個人のパフォーマンスを悪くしたり、逆に良くしたりする要因の大きなウェイトを占めているのではないかと考える。

3. インタビュー法による予備調査

フェンシングにおける個人戦と団体戦の試合形式の違いにより、メンタルがパフォーマンスに対して大きく影響し、さらにそれには個人差があると考えられる。その個人差について、実際に選手はどのような考えをもっているのかを知ることが、定量的な質問紙調査をする前に必要であると考えた。そのために、インタビュー形式で予備調査を行った。

3-1. 調査方法と結果の概要

事前調査として、特定の選手を抽出してインタビュー調査を行った。対象者はいずれも、本学フェンシング部員4名である。内訳は男子3名（下記記録①②③）、女子1名（下記記録④）である。実

施時期は2009年4月中旬から5月中旬であった。この時期にインタビューを行った理由は、2009年の4月中旬に大学の主要な大会でもある「関西学生フェンシングリーグ戦」があったため、その直後以降に実施せざるを得なかった。なお、各選手とも、その大会にチームを代表して団体戦の試合に出場した。

インタビューは、「団体戦は好きか」「団体戦では力が発揮できるか」といった内容で1人1人個別に行った。個々のインタビュー内容及び記録については、4-2.節の「インタビュー記録①～④」にまとめた通りである。

記録①

対象者：男子A（朝日大学フェンシング部2年 レギュラー）
日時：2009年4月16日（木）16：00～16：30
場所：朝日大学3号館1階体育会事務室

<質問事項及び回答>

- 個人戦と団体戦の好き嫌いはあるか
個人戦は好き。団体戦が嫌いではないがやらなきゃいけないからやる。
- 個人戦と団体戦に得意、不得意はあるか（苦手意識などはあるか）
個人戦は得意。団体戦は苦手だった。今は考え方を少し方を変えようとして、前よりも苦手意識は少なくなった。団体戦は苦手というより怖い。
- 個人戦と団体戦に得意、不得意がある場合、その根拠は
個人戦は、自分の責任。団体戦はチームの重みがプレッシャーになる。自分の得点やプレーがチームに影響するから責任が重い。応援などの影響は特に感じてはいない。
- 個人戦と団体戦のメンタル的な違いを感じているか
団体戦で信頼関係があれば、盛り上がって思いきりプレーできた時もあった。その時は個人戦よりも良いプレーができたと感じた。そういう時は団体戦も楽しい。1ポイント（得点）の価値は変わらないが、ポイントをとったときのうれしさが個人戦よりも大きい。団体戦でムードが悪いときは「1本とらなきゃいけない」と考えてしまう。良いときは「1本を取りたい」と考える。団体戦ではチームプレーということを考えると自分のプレーが束縛される。個人戦と比べて、思いきりプレーができない。技も制限される。団体戦ではどちらかという気持ち的にも守りになってしまう。
- 団体戦での安心感や逆に不安感はあるか
安心感はない。不安のほうが大きい。チームメイトが良いと、安心とは逆に自分もしっかりやらなくちゃいけないと考えてプレッシャーがかかる。チームメイトの調子が悪いと逆に自分が頑張らないといけないと考えてしまう。
- その他感じていること
個人戦においては人が見ているほうが気持ちが高ぶってやる気がでる。周りに力を認めてもらえアピールができる。試合中に盛り上がると、思いきりプレーできる。チームの雰囲気が良いと気持ちも楽になる。個人戦はプレーで自分を盛

り上げる。

団体戦では、試合中に予期せぬ出来事（意外な技で点をとったり、補欠が勝ったりした時）や、流れが来るとチームが盛り上がり、自分自身のプレーも思いっきりできる。意外性があると雰囲気がよく盛り上がる。

記録②

対象者：男子B（朝日大学フェンシング部3年 レギュラー）
日時：2009年5月11日（月）15：30～15：45
場所：朝日大学3号館1階体育会事務室

<質問事項及び回答>

- 個人戦と団体戦の好き嫌いはあるか
個人戦のほうが気持ち的に楽なので好き。団体戦はチームに迷惑をかけてしまうかもしれないという不安があるので好きではない。
- 個人戦と団体戦に得意、不得意はあるか（苦手意識などはあるか）
意識的には特にしていない。
- 個人戦と団体戦のメンタル的な違いを感じているか
個人戦よりも団体戦のほうが緊張する。
- 団体戦のほうが緊張するという要因は
個人戦は自分ひとりで戦えるから気楽。団体戦はみんなのためということを考えて荷が重い。個人戦は積極的に攻撃できたりするが、団体戦はプレーが守りにはいつってしまう。チームに迷惑をかけないようにしようと考え、無謀なことができない。

記録③

対象者：男子C（朝日大学フェンシング部4年 レギュラー）
日時：2009年4月16日（木）14：35～15：00
場所：朝日大学3号館1階体育会事務室

<質問事項及び回答>

- 個人戦と団体戦の好き嫌いはあるか
どちらかという個人戦は好き。団体戦は嫌いではないが、どちらともいえない。
- 個人戦と団体戦に得意、不得意はあるか（苦手意識などはあるか）
得意、不得意という意識は特にないが、どちらかという団体戦は苦手
- 団体戦が苦手だと感じる根拠は
団体戦のほうが個人戦に比べて、あきらかに緊張する。チームのベンチの仲間や応援が自分に注目している。自分の試合に集中してみられている。
- 個人戦と団体戦のメンタル的な違いを感じているか
個人戦は自分が負けてもまわりに影響を与えない。団体戦は個人戦と比べてプレッシャーが違う。個人戦は自分の試合だから結果も周りに影響しないため思いきりプレーでき、大胆なプレーや汚いプレーでもポイントを取ろうと出来るが、団体戦はチームのことを考えると確実に勝たないといけないと考え、下手なことができないためプレーは慎重になり、消極的になって硬くなってしまいます。
- 団体戦での安心感や逆に不安感はあるか
チームメイトが頼りないときは不安を感じる時がある。

逆にチームメイトが強いときは安心できることもある。

●その他

団体戦の前などは緊張が強く、身体にも影響がでてお腹が痛くなったりする。

記録④

対象者：女子D（朝日大学フェンシング部3年 レギュラー）

日時：2009年4月28日（火）21：30～22：10

場所：朝日大学3号館1階

<質問事項及び回答>

●個人戦と団体戦の好き嫌いはあるか

個人戦は好きではない。団体戦のほうが好き。

●個人戦と団体戦に得意、不得意はあるか（苦手意識などはあるか）

個人戦が苦手と団体戦は得意だと思っている。

●個人戦が苦手と団体戦は得意だと思う根拠は

個人戦では結果が残せていないため、自信がない。個人戦では、団体戦に比べて応援がないから自分ひとりで戦っているような感じが強い。他のチームメイトが個人戦で結果を残しているからプレッシャーになっており、引け目を感じている。

団体戦はチームメイトがいるから安心する。個人戦では焦ったりしても自分の力でとめられないが団体戦ではチームメイトが注意やアドバイスをしてくれることで修正できる時があり安心する。

●個人戦と団体戦のメンタル的な違いを感じているか

団体戦では、自分の自信のないところや苦手なところを他のメンバーが補ってくれる。自分がポイントを取れなくても他のメンバーが取ってきてくれる安心感がどこかにある。団体は仲間がアドバイスをしてくれるから安心する。

●メンタルの違いでプレーはどうなるか

気持的に個人戦では劣勢になった時にすぐ妥協してしまい、負けてもいいやと思ってしまう。プレースタイルは個人戦も団体戦も特にかわりなくやっている。ただ、団体戦では一か八かの技は出しにくい。個人ではそれがだせる。

●団体戦での安心感や逆に不安感はあるか

団体戦では、エースが勝たないと不安になる。チームの雰囲気が悪いとき、監督が怒っているときなどは雰囲気にのまれてしまい不安になる。逆に流れが良いときは思いきりできる。緊張感は両方ともかわらない。みんなが調子良いときは安心できる。

●その他

個人戦でのタイトルはほしいと思っているけど個人戦は自信がない。団体戦でのタイトルは自分の名前に残らないけど、貢献していると思えるから頑張れる。

試合のとき応援などが多いと見られていると感じて気が散るのでないほうがいい。周りの人に良く見られたいとは思わないから観客がいても頑張れない。

高校でフェンシングをやっていた時は個人戦にもある程度自信があって好きだった。中学時代にバスケットをやっていたが、その当時はチームプレーがあまり好きではなく、自分が頑張っても他の人が駄目だとその人のせいになってしまったりするのが嫌でフェンシングという個人競技を始めたきっかけがある。バスケットをやっていた中学時代はメンタルという存在を知らなかった。高校でフェンシングを始めたころからその存在を知り、意識するようになった。

3-2. インタビュー結果の考察

以上の4名のインタビュー結果を総合すると、「団体戦」というものにはメンタル的な要素、特に性格特性が非常に強く関わっていることが見受けられた。このインタビューでは、大変興味深い意見を聞くことができた。男子の3名は「団体戦に苦手意識がある」と答え、女子の1名は「団体戦に苦手意識を持っていない」と答えた。

まず、男子選手の3名はほぼ同回答で「団体戦は個人戦に比べると緊張する」という意見だった。それに比べ、女子選手の1名は男子の回答とは異なり「団体戦のほうが個人戦と比べて安心できる」と答えた。この結果には、調査者自身もインタビューを行いながら、大変興味深く感じた。というのは、調査者が選手時代も指導者になってからも、ほとんどの選手が団体戦の方が緊張して自分の実力を発揮できないのではないかと考えていたからだ。その根拠としては、個人戦と団体戦とでは自分自身にかかってくる「プレッシャー」の大きさがあきらかに団体戦の方が強いと考えているからである。したがって、個人戦に比べると、団体戦の方が、緊張によって実力は発揮しにくいのではないかと考えた。

しかし1人の選手（選手④）からは「団体戦はチームメイトと協力して戦えるから心強い」ということが聞けた。このことから、調査者自身の経験や先入観にかかわらず、やはり個人戦と団体戦という試合形式の違いが、個人になんらかの影響を与えていることが推察された。

この個人差を分析すると、性格的な要因が潜んでいるのではないかと考えられる。例えば選手①は、団体戦において「思いきりプレーができない。技も制限される。団体戦ではどちらかという気持ち的にも守りになってしまう」、選手③は「団体戦のほうが個人戦に比べて、あきらかに緊張する」と回答している一方、団体戦が得意と考える選手④は「団体戦では、自分の自信のないところや苦手なところを他のメンバーが補ってくれる」との回答をしている。これは、団体戦の特性の両側面を表していると考えられるが、選手個人の内

的な特性によって、競技に対する意識が変わってくるのだと思われる。つまり、選手の性格の違いによって、同じ団体戦に対するとらえ方が異なり、片方では「緊張するので思い通りにできない」結果になってしまい、片方では「苦手なことを他のメンバーが補ってくれる」結果になるのだと考えられる。

今回のインタビュー結果は、サンプル数が少ないために確定的なことは言えない。しかし、個人戦と団体戦の違いに影響するメンタル要素は多々考えられる。以上の予備調査結果により、性格的要因が最大の影響を与えているのではないかと推測することは可能であろう。

4. スポーツと性格

本節では、スポーツと性格の関係について様々な視点から分析し、フェンシングにおける個人戦と団体戦に影響する性格特性が何かということについて検討する。

4-1. スポーツ選手の性格特性に関する先行研究

多くの人は、スポーツをする者としていない者との間には明らかな性格の違いがある印象を持っている。例えば「明朗快活」、「積極的で行動力がある」、「困難に挫けない」といった、いわゆるスポーツマン的性格があるように思われている。正木(2003)によると、競技者を対象とした性格に関する調査結果の多くは、以下のような傾向を示すという。スポーツ選手は非競技者に比較して外向性が高く、不安傾向は低いというものである。また、こうした研究の中には、競技種目によって選手の性格特性が異なることを示唆したものも少なくない。例えば、チームスポーツの選手は、活動的でおおらかな反面、攻撃的で主導的立場を望む傾向があり、個人スポーツの選手は、克己心と責任感が強い反面、協調性の欠如、劣等感、神経質と特徴付けられるという。ただし、性格特性が競技種目を選択するのか、競技種目によって性格特性が形成されるのかという問題ははまだ解決をみ

ていない。行動は個人の性格特性と状況との相互作用によって決定されることから、スポーツ選手の性格特性は「スポーツが先か、性格が先か」という二者択一的なとらえ方でなく、両者の可能性を考える必要がある。

ラーナーとロック(Lerner and Locke, 1995)が、スポーツ志向質問紙(Sport Orientation Questionnaire, SOQ)という性格検査を用いて、アメリカ人の学部学生60人の競争心と達成動機づけを測定した。その結果、性格と課題成績との間に、ガーランドとバリーの研究で見られたのと同程度の正の相関が認められた。しかし、パフォーマンスに対する影響は、性格よりも目標設定や自己効力感など、他の心理学的要因のほうが強かった。

シュールら(1977)の研究においては、スポーツ競技選手と非競技者の間には性格特性にほとんど違いがなかったものの、団体種目の選手と個人種目の選手の間には大きな違いが認められた。団体種目(例えばサッカーやラグビー)の選手は、活動的でおおらかな反面、攻撃的で主導的立場を望む傾向があり、個人種目の選手に比べて不安傾向が高く、外交的だったということがわかった。一方、個人種目(例えば陸上やレスリング)の選手は、克己心と責任感が強い反面、協調性の欠如、劣等感、神経質といった特徴があるという。また、トライアスロンなどの持久的競技では粘着気質性が非常に高い、ということがわかっている。

一方で、フェンシングなど、「基本的には個人種目という部類なのに、団体戦もある」という特殊競技においては、性格特性などの研究はされていない。本研究では、そこに着目して、研究の独自性を求めることとする。

4-2. 個人戦と団体戦に影響する性格的要因

本研究で着目した、フェンシングにおける個人戦と団体戦のパフォーマンスの差異に関係してくる性格要素にはどんなものがあるのだろうか。性格特性に関する先行研究をもとに考察する。

4-1. 節で説明したとおり、競技者がパフォー

マンスを発揮するために必要な要素として“自己効力感”が挙げられる。そもそも自己効力感は優秀な選手にとって必要な性格特性であり、この測定尺度に対して高得点を出す選手は競技力が高く、よい選手である傾向が強いとされている。これが個人戦と団体戦の違いにどのように影響を与えるのかは予測しにくいところがあるが、スポーツ選手のパフォーマンスに影響する性格的要素の根底として、本研究では質問紙調査の項目に取り上げることとする。

次に、団体戦に影響しそうな性格要因は、“公的自己意識”と“私的自己意識”という、自己意識の2つの側面ではないかと考えた。

2-2. 節で述べたように、フェンシングでは他の競技とはかなり異なる団体戦の方式をとっている。これは、選手に与えるプレッシャーが非常に高いということは先述したとおりであるが、そこに影響を及ぼしそうな性格特性が公的自己意識である。

公的自己意識とは容姿や振る舞い方など他人から見られている自分の外的側面を意識する傾向のことである。また、公的自己意識の高い人は他者からの評価的態度に敏感であるという特徴がある。団体戦においては、個人戦とは異なり、周囲のチームメイトや応援の存在がある。一方で対戦相手にも、個人戦より多くのチームメイトや応援が関わってくる。このことから、公的自己意識の高低が、団体戦における選手のメンタルとパフォーマンスに対し何らかの影響を与えている可能性は高い。

一方で、自己意識のもう一つの側面である私的自己意識にも着目できる。私的自己意識とは、自分の感情や考え、態度など内的なもので他者は直接知ることができないような側面に注意を向けやすい傾向を示すものである。私的自己意識の高い人は態度と行動の一貫性が高い特徴がある。このことから、私的自己意識が高い選手は、個人戦でも団体戦でも変わらず自分のプレーができると考えられる。

これらの3つの性格要因がフェンシングにおけ

る団体戦に出場する選手のメンタルやパフォーマンスに、強い影響を与えているのではないかと推測し、本調査で測定する項目に組み込んだ。以下の節では、その妥当性を探るために、これらの3つの性格要因に関する先行研究について、概略を述べる。

4-2-1. 自己効力感

自己効力感とは心理学者アルバート・バンデューラ (Bandura, 1982) によって提唱された心理学用語である。自己に対する信頼感や有能感のことをいう。自分がある具体的な状況において、適切な行動を成功裡に遂行できるという予測および確信を意味する。

人がある行動を起こそうとする時、その行動を自分がどの程度うまく行えそうか、という予測の程度によって、その後の行動の生起は左右される。つまり、「自分にはここまでできる」という思いが行動を引き起こす。換言すれば、ある課題を与えられた時に、自己効力感の高い人は「よし、やってみよう」と思うことができ、その後の行動につながる。

一方、自己効力感の低い人は「その課題は自分にはできないかもしれない」と尻込みする傾向があり、その後の行動にはつながらないこととなる。行動を起こすためには、自己効力感という入り口を通過しなくてはならないといえる。

自己効力感とは、自分がある具体的な状況において、適切な行動を成功裡に遂行できるという予測および確信を意味する。この自己効力感とは、社会的認知理論の中核をなす概念であり、行動の先行要因として位置づけられる動機づけ概念である。スポーツ場面の自己効力感に関する研究は数多く行われ、自己効力感の高まりがパフォーマンスへポジティブに影響することが示されている (Bandura, 1977)。

4-2-2. 私的自己意識と公的自己意識

私的自己意識と公的自己意識については、日本では菅原健介が多く研究をしている。ここでは、

菅原 (2004) の記述に従って、私的自己意識と公的自己意識の定義と内容についてまとめる。

自分に対してどの程度注意を向けやすいかには個人差がある。フェンシングスタインら (Fenigstein et al., 1975) は、自分への関心を表わす記述を集め、それらに自分がどの程度当てはまるかを評定させてみた。その結果、人によってその程度には大きなばらつきがみられたが、項目を因子分析によって分類したところ、自己への関心の持ち方に2つの種類を区別できることがわかった。1つは、「つねに自分を理解しようと努力している」「ふと、一歩はなれたところから自分をながめる」など、自己の内面に関する関心の強さを示す項目であった。他方は、「人が自分をどう思っているか気になる」「何かするときの格好に気を遣う」など、自己の外面对する関心を示す項目であった。フェンシングスタインらは、前者を「私的自己意識 (private self-consciousness)」、後者を「公的自己意識 (public self-consciousness)」と名づけたが、最近ではこうした傾向の違いが、個人が自己に注意を向ける目的の違いを反映したものだと思われる研究者が多い。前者は理想的な自分を追い求める克己心が背景になるのに対して、後者は他者への印象管理的な動機によって高められている (押見, 1992)。

鍋田ら (1988) によれば、私的自己意識の強い人に自分の性格イメージに合う言葉を挙げてもらったところ、「自分に厳しい」「わが道を行く」「一風変わった」といった内容が多かった。一方、公的自己意識が強い人に同じことを求めると、「流されて生きている」「なんとなく生きている」などといった答えが返ってくるという。私的自己意識は自分の価値観や理想に行動を合わせようとするので行動パターンはいつも一貫している。これに対して、公的自己意識が高い場合、行動基準はあくまで対する他者の期待や場の規範なので、自己の姿は状況によってまち

まちになるわけである。自己制御に目的の違いが、こうした個人差に反映されていることを示している。

(菅原, 2004)

以上のように、菅原の分析からは、私的自己意識が高い人間は一言で言うならば、「“芯”がある人間」ということになる。このような選手は、フェンシングの試合においては、試合の形式 (個人戦や団体戦) にかかわらず自分の実力を出すことができると考えられる。

一方、公的自己意識の高い人間は、「周りに影響される」タイプである。フェンシングの試合では、状況が緊迫したり、他者の影響が強くなる場面では、本当は実力があっても、自分の実力を発揮できなくなると考えられる。特に、団体戦のように「チームの状態」や「応援・声援の多寡」など、周囲の人間的な状況が変化したり、プレッシャーを与えるような状況になると、このような人間は緊張状態に陥り、実力が出ないのではないかと考えられる。

5. 仮説

以上の議論から、フェンシングにおける団体戦のメンタルおよびパフォーマンスに強く影響する性格要因は、①自己効力感、②私的自己意識、③公的自己意識の3つではないかと考えた。本調査では、この3つの性格を測定する尺度を含んだ質問紙を構成し、データを採集する。

仮説1. 「公的自己意識が高く、私的自己意識の低い選手は団体戦で実力を発揮できない。もしくは団体戦を苦手としている。」

仮説1. は公的自己意識が高く、私的自己意識の低い人の傾向として「意志が弱い、流されて生きる、状況に応じて自己をコントロールする」とされていることから、公的自己意識の高い選手は他者から見られる自分を必要以上に意識してしまう。

フェンシングの団体戦においては、他者の注目度が高くなることから、良い影響を与えないと考える。さらには、状況に応じて自己をコントロールしてしまうことから、団体戦のように「流れ」が大きく変わるような試合においては、自己のパフォーマンスを貫き通すのは困難であると考えた。

仮説2. 「私的自己意識が高く、公的自己意識の低い選手は個人戦と団体戦の違いで実力の発揮には影響しない」

仮説2. は仮説1. に付随するものである。「私的自己意識が高く、公的自己意識の低い人」の傾向として「我が道を行く、自分に厳しい」など自分の信念や価値観を明確に持っている人とされていることから、フェンシングの試合においても、個人戦の時と同様、自分のプレーを貫くことができると仮定し、「団体戦」と「個人戦」の違いでパフォーマンスに影響はないと考えられる。

仮説1.、仮説2. をまとめたものを、表5-1. に表した。

表5-1. 私的・公的自己意識が団体戦への苦手意識に与える影響（仮説）

団体戦への苦手意識	公的自己意識が高い	公的自己意識が低い
私的自己意識が高い	中	弱
私的自己意識が低い	強	中

1. 「公的自己意識が高く、私的自己意識の低い選手」は団体戦に苦手意識が強い。
2. 「私的自己意識が高く、公的自己意識の低い選手」は団体戦での苦手意識が弱い。

以上の仮説1. と仮説2. を検証することにより、将来的には、選手の私的自己意識及び公的自己意識を測定することで、「団体戦」で活躍できる選手かそうでない選手かを判別できることになる。また、指導者などが実際の試合で選手をメンバー

選出する際の情報とすることができるため、有用であると考えられる。

6. 方法

本研究では、実験計画法に基づいて設計した質問紙による調査を行った。配布・回収は2009年9月～10月にかけて行った。調査対象は岐阜県内の高校生、本学大学生、そして岐阜県に在住の社会人選手（現役の日本代表選手を含む）の3カテゴリーのフェンシング競技者である。それぞれの群に属する人数は、表6-1. に示すとおりである。

表6-1. 調査対象の基本的属性

	高校生	大学生	社会人
男性	25	25	3
女性	25	17	6

まず、9月中旬に本学のフェンシング部員に対して、本研究の概要説明と質問紙に対する説明を行い、質問紙配布を行った。回収は回答後、随時とした。

次に、県内の高校生については、4つの高校のフェンシング部顧問に調査概要を十分理解していただいた上で、質問紙とそれに係る説明文を10月8日に郵送した。2週間の期限を設けて随時、回答を返信してもらい、回収した。

最後に、社会人の選手については、9月上旬から10月下旬にかけて本学の練習場における練習会実施時に、質問紙の配布・回収を行った。

6-1. 質問紙の構成

本質問紙は、回答者の属性を調べる「フェイスシート」、従属変数を測定する「フェンシングに対する関与」、性格特性を調べる「自己効力感」「公的自己意識及び私的自己意識」の4部構成である。

6-1-1. フェイスシート

フェイスシートでは1. 性別、2. カテゴリー（高

校生・大学生・社会人)、3. フェンシングの経験年数、4. レギュラーとして団体戦に出場したことが一度でもあるか、の情報を収集した。氏名は今回の調査では回答させなかった。これは、(日常的な監督・評価者でもある) 調査者に対して、選手が自分を良く見せようと思う回答をすることにより、データが歪む“実験者効果”を回避するためである。

6-1-2. フェンシングに対する関与

フェンシングに対する自己の関与について16個の項目を独自に作成し測定した。項目は、図6-1. に挙げるとおりである。ここでは回答者のフェンシングに対する関与の強さやフェンシングに対しての有能感、「団体戦」と「個人戦」に対する意識の持ち方及び試合でのパフォーマンスの発揮などについての16項目を用いた。本項目群を整理した結果を、従属変数および独立変数として用いる。

評定方法は「そう思う…5点、どちらかといえばそう思う…4点、どちらともいえない…3点、どちらかといえばそう思わない…2点、そう思わない…1点」の5件法で行った。

※12. ~16. の質問には団体戦に出場した経験のある人は回答してください。

1. フェンシングが好き
2. フェンシングが楽しい
3. フェンシングをこれからも続けたい
4. 試合は楽しい
5. 試合は緊張する
6. 試合で自分の力を発揮できる
7. 応援されると力が発揮できる
8. 試合では観客がいると力が発揮できない
9. チームメイトとは仲が良い
10. 試合で勝ちたい
11. 同世代で自分は強いほうだ
12. 団体戦より個人戦のほうが好き
13. 団体戦は個人戦よりも緊張する

14. 個人戦は団体戦よりも気楽
15. 個人戦において、自分の力が発揮できる
16. 団体戦において、自分の力が発揮できる

図6-1. フェンシングに対する関与尺度

6-1-3. 自己効力感

本研究で用いた自己効力感尺度は、シェラーら(1982)が作成した自己効力感尺度(SE尺度)を成田ら(1995)が邦訳したものである。原尺度は、①「行動を起こす意志」、②「行動を完了しようと努力する意志」、③「逆境における忍耐」などから構成されている。項目は、図6-2. に示したとおりである。なお、末尾に(*)がついた項目は、逆転項目である。本尺度の評定は、「フェンシングに対する関与」と同様の5件法である。

1. 自分が立てた計画はうまくできる自信がある
2. しなければいけないことがあってもなかなかとりかからない
3. 初めはうまくいかない仕事でも、できるまでやり続ける
4. 新しい友達を作るのが苦手だ(*)
5. 重要な目標を決めても、めったに成功しない(*)
6. 何かを終える前にあきらめてしまう(*)
7. 会いたい人を見かけたら、向こうから来るのを待たないでその人の所へ行く
8. 困難に出会うのを避ける(*)
9. 非常にややこしく見えることには、手を出そうとは思わない(*)
10. 友達になりたい人でも、友達になるのが大変ならばすぐに止めてしまう(*)
11. 面白くないことをする時でも、それが終わるまで頑張る
12. 何かをしようと思ったら、すぐにとりかかる
13. 新しいことを始めようと決めても、出だしてつまづくときすぐにあきらめてしまう(*)
14. 最初は友達になる気がしない人でも、すぐ

- にあきらめないで友達になろうとする
15. 思いがけない問題が起こった時、それをうまく処理できない (*)
 16. 難しそうなことは、新たに学ぼうとは思わない (*)
 17. 失敗すると一生懸命やろうと思う
 18. 人の集まりの中では、うまく振る舞えない (*)
 19. 何かしようとする時、自分にそれができかどうか不安になる (*)
 20. 人に頼らない方だ
 21. 私は自分から友達を作るのがうまい
 22. すぐにあきらめてしまう (*)
 23. 人生で起きる問題の多くは処理できるとは思えない (*)

図6-2. 自己効力感尺度

6-1-4. 公的自己意識及び私的自己意識

本尺度は、自分自身にどの程度注意を向けやすいかの個人差（自意識特性）を測定するものである。本研究では、フェニングスタイン（1975）の尺度を菅原（1984）が翻訳し、信頼性を検討したものをを用いた。項目は、図6-3、図6-4. に示したとおりである。なお、末尾に（*）がついた項目は、逆転項目である。

本尺度の評定方法は、原尺度では7件法になっているが、本研究では分析の都合上、「フェンシングに対する関与」と同様の5件法で評定させた。

1. 自分が他人にどう思われているのか気になる
2. 世間体など気にならない (*)
3. 人に会う時、どんなふうにふるまえば良いのか気になる
4. 自分の発言を他人がどう受け取ったか気になる
5. 人にみられていると、つかっこうをつけてしまう
6. 自分の容姿を気にするほうだ
7. 自分についてのうわさに関心がある

8. 人前で何かをするとき、自分のしぐさや姿が気になる
9. 他人からの評価を考えながら行動する
10. 初対面の人に、自分の印象を悪くしないように気づかう
11. 人の目に映る自分の姿に心を配る

図6-3. 公的自己意識尺度

1. 自分がどんな人間か自覚しようと努めている
2. その時々のお気持ちの動きを自分自身でつかんでいたい
3. 自分自身の内面のことは、あまり関心がない (*)
4. 自分が本当は何をしたいのか考えながら行動する
5. ふと、一步離れた所から自分をながめてみることがある
6. 自分を反省してることが多い
7. 他人を見るように自分をながめていることがある
8. しばしば、自分の心を理解しようとする
9. つねに、自分自身を見つめる目を忘れないようにしている
10. 気分が変わると自分自身でそれを敏感に感じ取る方だ

図6-4. 私的自己意識尺度

7. 結果

以下の統計的な分析は、統計演算パッケージ SPSS Ver. 10.0Jを用いて行った。

7-1. 因子分析による従属変数の整備

「フェンシングに対する関与」について、探索的因子分析を行った。これにより項目群から、主要な従属変数である「団体戦を得意と認知しているか、不得意と認知しているか」という内容の項目を弁別する。さらに、フェンシングへの関与が、どのような成り立ちにより構成されているかを明

らかにする。最後に、各因子の因子得点を算出し、従属変数および独立変数として用いる。

分析は、共通性の初期推定値として重相関係数を代入し、主因子法を用いて行った。因子数を2-4の間で変化させ、バリマックス法による直交回転、プロマックス法による斜交回転などを行い結果の整理を行い因子構造の検討を行った。最終的に、プロマックス法を用いて3因子構造に整理した場合に、最も解釈しやすいと考えた。

結果は、表7-1.に示すとおりである。Factor 1は、「Q1-6.試合で自分の力を発揮できる」「Q1-11.同世代で自分は強い方だ」などの項目が含まれているため、「フェンシングの有能感」因子と命名した。この中には、「Q1-15.個人戦において、自分の力が発揮できる」「Q1-5.試合は緊張する(逆負荷)」が含まれている。つまり、フェンシングに対して有能感の高い選手は、個人戦が得意であり、試合ではあまり緊張しないと考えているという傾向を示している。

Factor 2は「Q1-1.フェンシングが好き」などの「フェンシングとの関与」を示す類似項目が集まったため、「フェンシングへの関与」因子と命名した。

Factor 3では「Q1-12.団体戦より個人戦の方が好き(逆負荷)」、「Q1-16.団体戦において、自分の力が発揮できる」という項目の負荷が高かった。この因子を「団体戦が得意」因子と命名した。

「Q1-8.試合では観客がいると力が発揮できない」「Q1-9.チームメイトとは仲がよい」「Q1-10.試合で勝ちたい」は、今回の分析の結果では、どの因子にも強い負荷を見せなかった。この3項目については、他の項目との関連が薄い孤立項目と考えて、以降の分析では用いないこととした。

各因子を変数として用いるため、回帰法を用いて因子得点を算出した。

表7-1. 因子分析による従属変数の整備

Factor 1	回転後因子負荷量	因子抽出後共通性
6. 試合で自分の力を発揮できる	0.815	0.644
15. 個人戦において、自分の力が発揮できる	0.786	0.58
5. 試合は緊張する	-0.436	0.156
11. 同世代で自分は強いほうだ	0.415	0.256
4. 試合は楽しい	0.403	0.299

Factor 2	回転後因子負荷量	因子抽出後共通性
1. フェンシングが好き	0.829	0.664
2. フェンシングが楽しい	0.802	0.703
3. フェンシングをこれからも続けたい	0.714	0.485

Factor 3	回転後因子負荷量	因子抽出後共通性
12. 団体戦より個人戦のほうが好き	-0.612	0.369
16. 団体戦において、自分の力が発揮できる	0.541	0.472
14. 個人戦は団体戦よりも気楽	-0.479	0.223
7. 応援されると力が発揮できる	0.441	0.208
13. 団体戦は個人戦よりも緊張する	-0.312	0.153

孤立項目	回転後因子負荷量	因子抽出後共通性
8. 試合では観客がいると力が発揮できない		0
9. チームメイトとは仲が良い		0
10. 試合で勝ちたい		0

7-2. 重回帰分析の結果

「団体戦が得意」に対して、「フェンシングでの有能感」、「フェンシングへの関与」および、性格尺度変数である「自己効力感」、「公的自己意識」、「私的自己意識」の各変数が、どのように影響しているかを調べるために、重回帰分析を行った。目的変数を「団体戦が得意」とし、説明変数をその他の5つの変数とした。重回帰分析の手法には、ステップワイズ法を用いた。結果は、表7-2.に示すとおりである。

表7-2. 目的変数を「団体戦が得意」とした重回帰分析結果

説明変数	標準偏回帰係数(β)	有意確率(p)
「フェンシングでの有能感」	.251	.017

調整済み決定係数：R² = .053

この分析結果は決定係数が.053と非常に低く、あまり信頼性が高いものではないが、「フェンシ

ングでの有能感」が高い調査対象ほど、「団体戦が得意」と感じているという結果になった。一方で、「フェンシングへの関与」、「自己効力感」、「公的自己意識」、「私的自己意識」の各変数は、「団体戦が得意」という感覚に対して、直接的な影響を及ぼしていないことが明らかになった。

7-3. 分散分析の結果

仮説を検証するために、分散分析を用いた統計的分析を行った。結果は、7-3-1.~7-3-4.節に示す通りである。7-1.で算出された「団体戦が得意」因子の因子得点を従属変数、各性格尺度得点を独立変数とし、公的自己意識の高低と、他の独立変数の交互効果を検討した。

各独立変数による「高」「低」群は、以下のように作成した。まず、各性格尺度得点の平均値を算出し、平均値よりも高い得点を取った調査対象を「高」群、低い得点を取った調査対象を「低」群とした。

7-3-1. 「公的自己意識」と「自己効力感」を独立変数とした分散分析結果

表7-3-1. 「公的自己意識」と「自己効力感」の分散分析表

	自由度	F値	P
公的自己意識 (高低)	1	1.319	.254
自己効力感 (高低)	1	.001	.970
公的自己意識 (高低) × 自己効力感 (高低)	1	1.303	.257
誤差	94		

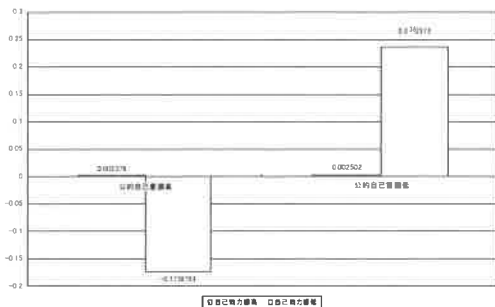


図7-3-1. 「公的自己意識」×「自己効力感」の因子得点グラフ

「公的自己意識」(高低)と「自己効力感」(高低)を独立変数、「団体戦が得意」得点を従属変数とした、2×2要因配置の分散分析を行った。結果は、図7-3-1.、表7-3-1.に示すとおりである。

「公的自己意識」については、 $F(1, 94) = 1.319$ ($p = .254$)であり、主効果は見られなかった。「自己効力感」については、 $F(1, 94) = .001$ ($p = .970$)であり、主効果は見られなかった。「公的自己意識」×「自己効力感」の交互効果は、 $F(1, 94) = 1.303$ ($p = .257$)であり、交互効果は見られなかった。

この結果から、団体戦が得意かどうかについて、公的自己意識の高低の影響は見られないことがわかった。公的自己意識および自己効力感が高くても低くても、団体戦が得意ということには関係がないことがわかった。

統計的に有意な結果は認められなかったが、図7-3-1.のグラフには、「公的自己意識が低い」ほうが団体戦を得意としている傾向が見られる。

7-3-2. 「公的自己意識」と「私的自己意識」を独立変数とした分散分析結果

表7-3-2. 「公的自己意識」と「私的自己意識」の分散分析表

	自由度	F値	P
公的自己意識 (高低)	1	1.097	.298
私的自己意識 (高低)	1	.544	.463
公的自己意識 (高低) × 私的自己意識 (高低)	1	.013	.911
誤差	94		

「公的自己意識」(高低)と「私的自己意識」(高低)を独立変数、「団体戦が得意」得点を従属変数とした、2×2要因配置の分散分析を行った。結果は、図7-3-2.、表7-3-2.に示すとおりである。

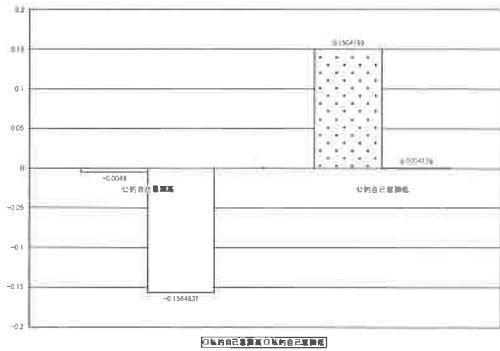


図7-3-2. 「公的自己意識」×「私的自己意識」の因子得点グラフ

「公的自己意識」については、 $F(1, 94) = 1.079$ ($p = .298$) であり、主効果は見られなかった。「私的自己意識」については、 $F(1, 94) = .544$ ($p = .463$) であり、主効果は見られなかった。「公的自己意識」×「私的自己意識」の交互効果は、 $F(1, 94) = .013$ ($p = .911$) であり、交互効果は見られなかった。

この結果から、団体戦が得意かどうかについて、公的自己意識の高低の影響は見られないことがわかった。公的自己意識および私的自己意識が高くても低くても、団体戦が得意ということには関係がないことがわかった。

統計的に有意な結果は認められなかったが、図7-3-2. グラフからは、公的自己意識が高くても私的自己意識が低い場合は団体戦を得意としない傾向が見られる。それとは反対に、公的自己意識が低くても私的自己意識が高い場合は団体戦を得意としているという傾向が見られる。

7-3-3. 「公的自己意識」と「フェンシングでの有能感」を独立変数とした分散分析結果

表7-3-3. 「公的自己意識」と「フェンシングでの有能感」の分散分析表

	自由度	F値	P
公的自己意識 (高低)	1	.688	.409
有能感 (高低)	1	6.787	.011
公的自己意識 (高低) × 有能感 (高低)	1	1.019	.315
誤差	94		

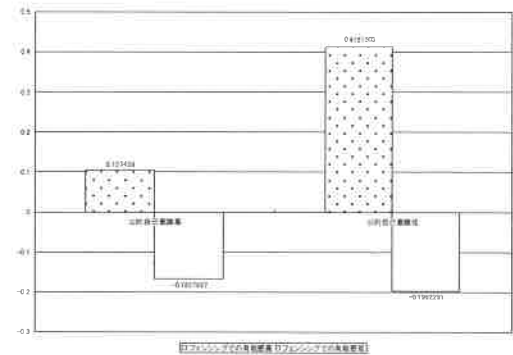


図7-3-3. 「公的自己意識」×「フェンシングでの有能感」の因子得点グラフ

「公的自己意識」(高低) と「フェンシングでの有能感」(高低) を独立変数、「団体戦が得意」得点を従属変数とした、 2×2 要因配置の分散分析を行った。結果は、図7-3-3.、表7-3-3. に示すとおりである。

「公的自己意識」については、 $F(1, 94) = .688$ ($p = .409$) であり、主効果は見られなかった。「フェンシングでの有能感」については、 $F(1, 94) = 6.787$ ($p = .011$) であり、主効果が見られた。「公的自己意識」×「フェンシングでの有能感」の交互効果は、 $F(1, 94) = 1.019$ ($p = .315$) であり、交互効果は見られなかった。

この結果から、団体戦が得意かどうかについて、公的自己意識の高低の影響は見られないことがわかった。公的自己意識およびフェンシングでの有能感が高くても低くても、団体戦が得意ということには関係がないことがわかった。

統計的有意な結果は認められなかったが、フェンシングの有能感が高い場合、公的自己意識の高低には影響なく、共にプラスを示していたことは、団体戦を得意としている傾向があると考えられる。それとは反対に、フェンシングの有能感が低い場合、公的自己意識の高低には影響なく、共にマイナスを示していたことから、団体戦を苦手としている傾向があると考えられる。

7-3-4. 「公的自己意識」と「フェンシングへの関与」を独立変数とした分散分析結果

表7-3-4. 「公的自己意識」と「フェンシングへの関与」の分散分析表

	自由度	F値	有意確率(P)
公的自己意識(高低)	1	.975	.326
関与(高低)	1	2.534	.115
公的自己意識(高低) × 関与(高低)	1	.009	.923
誤差	94		

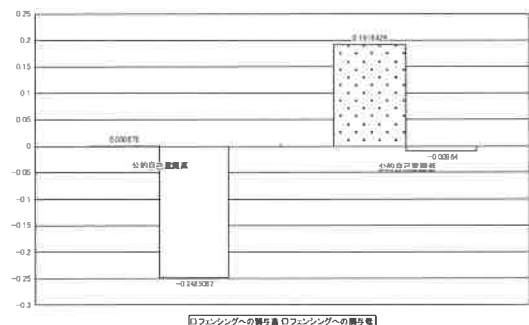


図7-3-4. 「公的自己意識」×「フェンシングでの有能感」の因子得点グラフ

「公的自己意識」(高低)と「フェンシングへの関与」(高低)を独立変数、「団体戦が得意」得点を従属変数とした、2×2要因配置の分散分析を行った。結果は、図7-3-4、表7-3-4.に示すとおりである。

「公的自己意識」については、 $F(1, 94) = .975$ ($p = .326$)であり、主効果は見られなかった。「フェンシングへの関与」については、 $F(1, 94)$

$= 2.534$ ($p = .115$)であり、主効果は見られなかった。「公的自己意識」×「フェンシングへの関与」の交互効果は、 $F(1, 94) = .009$ ($p = .923$)であり、交互効果は見られなかった。

この結果から、団体戦が得意かどうかについて、公的自己意識の高低の影響は見られないことがわかった。公的自己意識およびフェンシングへの関与が高くて低くても、団体戦が得意ということには関係がないことがわかった。

統計的に有意な結果は認められなかったが、図7-3-4.グラフからは、公的自己意識が高く、フェンシングの関与が低い場合は団体戦を苦手としている傾向が見られた。それとは反対に、公的自己意識が低く、フェンシングの関与が高い場合は団体戦を得意としている傾向があると考えられる。

7-4. 追加分析

7-3.節では分散分析を用いた仮説の検討を行ったが、有意な交互効果を確認することはできなかった。

一方で、7-2.節における重回帰分析の結果、「フェンシングでの有能感」が高い調査対象ほど、「団体戦が得意」と感じているという結果が得られた。

この結果を手がかりにし、当初構築した仮説検証の枠組みを外れた追加的な分析として、「フェンシングでの有能感」と「フェンシングへの関与」を独立変数とした分散分析を行った。

表7-4. 「フェンシングでの有能感」と「フェンシングへの関与」の分散分析表

	自由度	F値	P
フェンシングでの有能感(高低)	1	.971	.327
フェンシングへの関与(高低)	1	2.319	.131
有能感(高低) × 関与(高低)	1	3.693	.058
誤差	94		

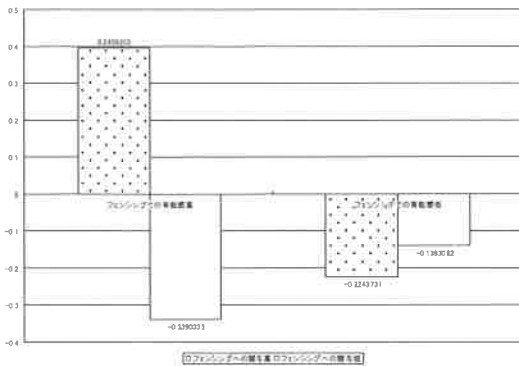


図7-4. 「フェンシングでの有能感」と「フェンシングへの関与」の因子得点グラフ

「フェンシングでの有能感」(高低)と「フェンシングへの関与」(高低)を独立変数、「団体戦が得意」得点を従属変数とした、 2×2 要因配置の分散分析を行った。結果は、図7-4.、表7-4.に示すとおりである。

「フェンシングでの有能感」については、 $F(1, 94) = .971$ ($p = .327$)であり、主効果は見られなかった。「フェンシングへの関与」については、 $F(1, 94) = 2.319$ ($p = .131$)であり、主効果は見られなかった。「フェンシングでの有能感」 \times 「フェンシングへの関与」の交互効果は、 $F(1, 94) = 3.693$ ($p = .058$)であり、交互効果の傾向が見られた。

この結果から、団体戦が得意かどうかについて、「フェンシングでの有能感」が高い群については、「フェンシングへの関与」が高い場合に「団体戦が得意」だと認知しているのに対し、「フェンシングへの関与」が低い場合は、「団体戦が苦手」だと認知しているということが分かった。「フェンシングでの有能感」が低い場合には、「フェンシングへの関与」の高低による団体戦の得意意識の違いは見られなかった。

8. 総合論議

8-1. 考察

今回行った分析結果では、期待していたような結果が得られなかった。特に、主要な仮説である、

1. 「公的自己意識が高く、私的自己意識の低い選手」団体戦に苦手意識が強い。

2. 「私的自己意識が高く、公的自己意識の低い選手」は団体戦での苦手意識が弱い。

を支持する、統計的に有意な結果は得られなかった。さらに、公的自己意識の高低に付帯する独立変数の組み合わせについても、統計的には有意な結果は見られなかった。しかし、7-4.節に示すとおり、「フェンシングでの有能感」と「フェンシングへの関与」が「団体戦が得意」という評価に及ぼす影響は、効果が小さいものの、有意な交互効果の傾向が見られた。また、公的自己意識の高低に付帯する各独立変数の組み合わせについては、統計的に有意ではないものの、仮説を支持する傾向であった。

8-1-1. 公的自己意識が団体戦の得意・不得意意識に与える効果

7-3-1.、~7-3-4.節に示した結果からわかるように、公的自己意識は高いよりも低いほうが団体戦を得意とする傾向が、統計的に有意ではないものの、全体として表れていた。今回の実験結果からは、仮説は支持されなかったが、仮説を支持する傾向にあると考えられる。「団体戦に出場する選手は公的自己意識が低いほうが良い」という仮説は、反証されるには至らなかった。

8-1-2. 私的自己意識が団体戦の得意・不得意意識に与える効果

7-3-2.節に示す「公的自己意識」と「私的自己意識」の効果を探った結果からは、統計的に有意な効果は得られなかったが、仮説を支持する傾向にあった。このことから、「公的自己意識が低く、私的自己意識は高い選手は団体戦に苦手意識が少ない」という仮説は、反証されるには至らなかった。

8-1-3. 有能感や関与が団体戦の得意・不得意意識に与える効果

7-3-3, ~7-3-5, 節に示した結果は、「フェンシングでの有能感」や「フェンシングへの関与」については高いほうが良いという傾向を示している。逆に、「フェンシングでの有能感」や「フェンシングへの関与」の低い選手は苦手意識が強いという傾向がみられた。

特に、結果7-3-5, でみられた「フェンシングでの有能感」と「フェンシングへの関与」では、有意な傾向の交互効果が得られた。このことから、「フェンシング選手としての自信がある」選手の中でも、「フェンシングが好きである」と考えている選手については団体戦が得意であると考えているのに対し、フェンシング選手としての自信があってもフェンシングに対する関与が低い選手については、団体戦が苦手であると考えているという傾向が見られた。これは、本研究において仮説を構築して検証した結果ではないが、興味深い結果であった。本研究では「公的自己意識」が、団体戦への得意意識に影響する性格要因であると仮定したが、フェンシングへの関与が重要な媒介要因になっている可能性を示唆する結果であった。

8-2. 本研究の限界と展望

本調査では、仮説を十分に実証したとは言えない結論が得られた。その原因として、①競技歴の異なる調査対象を一括して分析した、②団体戦が得意と思うかどうかの主観的な指標による測定を行った、の2点が挙げられる。本節では、この2点に関する追加調査の展望を述べる。

8-2-1. 競技歴による対象の比較

今回の実験対象者には高校生選手が含まれていた。特に1年生や2年生という、フェンシング経験や試合出場経験の少ない選手がいたことが、結果に大きく影響したのではないかと推測される。今後、競技歴の少ない選手を除いた結果で追加分析を行い、仮説を検証することが可能かどうか、データの見直しを進めたい。

将来的には、大学生、社会人といった十分な経験を積んだ選手の調査対象を拡大させ、調査対象

を絞ることにより、仮説を支持する結果が得られるのではないかと考えられる。今回の調査のように、競技歴の長短や、フェンシングに対する関与が非常に異なる調査対象を混在させると、統制できない要因が結果に影響してしまうことが考えられる。全国の他大学や社会人チームまたはナショナルチームなどの競技力が高く、経験が豊富な選手に的を絞った調査が必要であると考えられる。

8-2-2. 客観的競技力の指標の導入

仮説を支持する結果は得られなかった原因の1つとして、客観的な競技力を指標とすることができなかったことが挙げられる。本研究での「団体戦が得意かどうか」は、あくまでも調査対象者が「そう感じている」という主観的な指標に基づいたものである。このデータは、「本人は団体戦を得意と思っているが、実際には成績を残せていない」(あるいは逆)という、データの歪みを生じさせることが考えられる。

今回の調査では、調査者が直接指導している選手を調査対象とした。実験者効果によるデータの歪み(例えば「団体戦が不得意、と回答した場合に、代表選手から外されるのではないかと懸念)が生じないように、個人を特定できるような情報は得なかった。この工夫により、実験者効果は回避できたものの、調査対象者の団体戦での実際の成績等を特定することはできなくなった。さらに、例えば競技力や体格別に群を分け、結果を比較するなどの分析ができなかった。

今後、同様の研究をする場合には、①評価懸念などによる実験者効果が表れにくい調査対象(たとえば他大学の選手)を選定する、②実際の研究者が指導者だということが分からないように操作して実験を行う、などの方法を考慮すべきである。その場合、質問紙には記名を求め、後に回答者を追跡し、競技力を個別に抽出し競技力の差によってどのような違いが見られるかを調査することが望まれる。

8-3. 結論

本研究ではフェンシングにおける「個人戦」と「団体戦」の違いが選手に与える性格の要因についての検証を行った。しかし、選手のメンタルやパフォーマンスに明確な影響を与える性格特性の影響を見いだすことはできなかった。しかし、限定的ではあるが、選手の性格特性の違いが個人戦と団体戦への苦手意識に与える影響を示すことができた。

様々な研究上の限界により、残念ながら本研究の結果は明確であるとは言えない。しかし、本研究を通じて、今後、調査者自身が指導者として現場で指導していく上で役に立つ重要な知見を得たと考える。今後の指導では、これまで以上に選手の性格特性を少しでも理解するように考え、その特性がどのように試合に現れるのかを注目したい。より多くの経験や実績を重ねていくことで、より重要な性格特性が何であるのかが見えてくるようになれば、本研究の結果は生かされることになるのであらうと考える。

謝辞

本研究のインタビュー・質問紙調査に協力していただいた岐阜県の高校生、朝日大学フェンシング部員、及び岐阜県の社会人のフェンサーの方々に厚くお礼申し上げます。

引用文献

- Bandura, A. Social learning theory. Englewood Cliffs, Prentice Hall. [原野広太郎監訳 (1979)『社会学学習理論 - 人間理解と教育の基礎』金子書房.]
- Bandura, A. Self-efficacy mechanism in human agency. *American Psychologist*, 37, 122-47. 1982.
- Fenigstein, A., Scheier, M. F., & Buss, A. H. Public and private self-consciousness: Assessment and theory. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 43, 522-527. 1975.
- Jarvis, M., *Sport Psychology*, Routledge, 1999. (工藤和俊, 平田智秋訳, [スポーツ心理学入門], 新曜社, 2006)
- Krane, T. D., Marex, M. A., Zaccaro, S. J., and Blair, Z. self-efficacy, personal goals and wrestlers self-regulation. *Journal of Sport and Exercise Psychology*, 18, 36-48. 1996.
- Lerner, B. S. and Locke, E. A. The effects of goal-setting, self-efficacy, competition and personality traits on the performance of an endurance task. *Journal of Sport and Exercise Psychology*, 17, 138-52. 1995.
- 成田健一, 下仲順子, 河合千恵子, 佐藤真一, 長田由紀子, [特性的自己効力感尺度の検討—生涯発達の利用の可能性を探る 教育心理学研究, 43, 306-314, 1995.
- 鍋田恭孝, 菅原健介, 片山信吾, 越川裕樹, [自己意識からみた神経症をその周辺(2): 神経症化しやすい自己意識の偏りと性格傾向について]. *精神医学*, 30 (12) 1297-1304, 医学書院. 1988.
- 押見輝夫, [自分を見つめる自分: 自己フォーカスの社会心理学] サイエンス社. 1992
- Schurr, K. T., Ashley, M. A., and joy, K. L. [A multivariate analysis of male athlete characteristics: spot type and success. *Multivariate Experimental Clinical Research*, 3, 53-68. 1977.
- 菅原健介, [自己意識尺度 (self-consciousness scale) 日本語版作成の試み], *心理学研究*, 55, 184-188. 1984.
- 菅原健介 [ひとの目に映る自己—印象管理の心理学入門], 金子書房, 2004. (p.9)
- 杉原隆 [無心! という究極の集中], 宮本貢編 [朝日ワンテーママガジン③メンタル・トレーニング読本], 朝日新聞社, pp 56-65. 1993.

引用URL

- 正木宏明 [スポーツと心理] 早稲田大学スポーツ科学部, 2003
<http://www.waseda.jp/student/shinsho/html/69/6933.html>